

日本列島の古代史で今問題にすべきこと

「蝶の雑記帳 97a」

この稿は、準備中の書物『日本国はどのようにして成立したか
王朝交代規範からの推論』で本文の前に置く序文である。

第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章、補論は、「蝶の雑記帳 92、93、95、
96」に収録してある。冊子にするために加える第Ⅳ章「結論」は、
「蝶の雑記帳 97b」に掲載する。

序文 日本列島の古代史で今問題にすべきこと

人文科学の進展した今日になっても、日本古代史*について一定水準の蓋然性をもつ共通理解は得られていない。どこの国の歴史にしても、古代になるほど証拠と言える記録が減るので議論は困難になる。けれども、この国における旧来の議論では、近代的な研究の方法を考慮することが足りず、錯綜し矛盾すると考えられる古い記録類を対照して軽重と信頼性を検討し、それぞれの要素が合理的で全体としても整合性のある理解を導き出そうとする姿勢が足りなかった、とわたしには見える。とくに、日本列島*の社会の枠組みを決めたはずの政治体制の変遷について、「科学的な反証」に値するほどの論拠が足りないまま議論されてきたように思われる。

* 日本古代史や日本列島などの複合語を現代の意味で用いる。

「日本」は元来王朝の国号だったことに留意する必要がある。

現在支配的な日本古代史のパラダイムは、『古事記』と『日本書紀』の主張「ずいぶん古く奈良盆地に誕生した王権（王朝）が、そこを根拠地として列島に支配を広げていった」を骨格として組み立てられている。この見方では、中国史書の記述する「倭国」はこの王朝の国にほかならず、その国号はのちに「日本」になったから、列島の古代史はこの「日本国」の歴史ということになる（倭国を日本国と区別して議論することはまずない）。考古学的な知見もたいていこのパラダイムの大筋に反しないように説明されている。

しかし、『記・紀』の主張に沿う古代史像は、現代の学問の水準に照らしてゆるぎないものだろうか。そのパラダイムに対して、次に述べるように、無視できない疑義が提出されている。疑義があればそれを検討するのが学問的な態度である。物理学の例では、19世紀末の物理学はほとんど完成の域に達していると思われていたが、わずかな疑問が見つかるやがて古典力学を越える力学の発見に至った。自然科学でもそうだったのだから、歴史学の分野で既存のパラダイムはいっそう批判に開かれていなければならない。

日本列島の古代を研究するのに、『記・紀』のほかにある史料は歴代の中国史書と朝鮮半島の史料である。ところが、『記・紀』の主張に沿う現行の古代史パラダイムは、列島の政治体制にかかわる基本的な要点について、信頼性の高い中国史書の記述とのあいだにくいちがいがあるのを無視する。

現行パラダイムが秘めているこの矛盾を明るみに出して、古代史像の書き換えを提案したのは古田武彦である。古田説の要点は、第一に、「弥生時代の考古学的知見および『後漢書』と『三国志』の記述に基づけば、列島で最初に形成された国「倭国」は福岡都市圏を中心域とする」、第二に、「後続の中国史書を合理的に読み解けば、600年代末までの倭国もやはり福岡都市圏・太宰府を中心とする国だった」、第三に、「のちの日本国は倭国とは異なる王朝の建てた国である」という三つである。これら三点のどの一つをとっても、古田説は現行パラダイムの古代史像と相容れない。

こういう研究状況が続くなか、対立する二つの古代史像に対して相対的に独立な論点から論じたのが、拙著『倭国はここにあった 人文地理学的な論証』である。その論証は、これまでの古代史議論が主要な場としてきた文献と独立して、考古学的に知られていなかった物証的事実、すなわち遺跡や神社や山々の地理的關係を証拠としている。この実証的な方法は、倭国の中心が奈良盆地にあったか福岡都市圏にあったかの議論に、重大な一石を投じるものである。

発見された動かせない事実は、列島でも最重要な福岡都市圏の三つの弥生遺跡が驚くべき精度で東西約19kmに一直線に並んでいることである。東西線を決めたのは東の宝満山と西の飯盛山である。三遺跡は、春分・秋分と夏至や冬至の日に宝満山・飯盛山と目印になるほかの山々からの日の出を拝

むことのできる焦点に位置する。しかも、三つの遺跡のそばにある神社の祭神は、天神のイザナギ・イザナミや地神のヒコホホデミとその母、すなわち日本神話の主系列の神々である。前著でこの地理関係を「太陽の道」という概念に整理したが、東西線上に直列した三つの遺跡は、日本神話の神々への信仰がこの地域で発生したことを具体的に証言しているのである。この事実は、三遺跡が列島でも重要な弥生遺跡であることから、祭政一致の社会体制(もしくは世界のどこにもあった神権政治)が福岡都市圏で最初に形成された、という理解に導く。時期の異なる三遺跡は、それらの密接な関係すなわち歴史的な推移を示唆する。

詳細は前著にゆずるが、弥生時代に列島に形成された倭国が福岡都市圏にあったことは確実である。少なくとも、弥生時代に関しては、古田説に軍配を上げ、現行パラダイムを放棄すべきである。すると、そのパラダイムの骨格を与えた『記・紀』の主張も疑わなければならない。『記・紀』はどこまで信用できるか史料価値を再考しなければならない。

古墳時代とその後についても、前著は、宇佐宮と宗像大社が驚くべき精度で太宰府政庁跡の真東と真北にあること、それが「太陽の道」の発展形であることを論じて、二つの神殿の焦点太宰府に広域を支配する王がいたことを論証した。同時代の近畿地方にそれに匹敵するような「太陽の道」を見出すことはできない。高い蓋然性をもって、二つの大きな神殿の焦点にいた王こそ倭国の王だと結論することができる。

独立な方法を用いた拙著は、自然科学でいう追試に相当し、対立する二つの古代史像のうち古田説を追認したのである。

こうして、現在、古代の日本列島について次の二つの歴史像が鋭く対立している、と認識すべきである。

A：【ずっと一つの王朝が支配する「日本国」があった】

B：【古い王朝の「倭国」から新しい王朝の「日本国」への交代があった】

現行パラダイムが古代史像Aを承認するのに対し、新しい説は古代史像Bを提起している。ところが、古田武彦がB説を提起してからおよそ半世紀経つのに、現行パラダイムのA説を信奉する多数派はB説を無視している。これを、ある学界でパラダイムというものにありがちなことだ、と放置してはいけない。ひとつの学問分野で重大な問題に正面からとりくむ議論がなければ、そこでの研究は進展をさまたげられてしまう。現在の状況は打開されなければならない。だから今、対立する二つの古代史像のどちらがより整合的か真摯に議論すべきである。

前著『倭国はここにあった 人文地理学的な論証』で古代史像Bに軍配を上げた者が今為すべきことは、B説を支持する証拠をもっと探求することだろう。そのために、前著の姉妹編となる本書では、前著で考察の足りなかった点、古代史像Bを支持する記述は本当に『記・紀』にないのか詳細に再

検討しよう。そして可能なら、「倭国」から「日本国」への交代の画期を見出して、移行の経緯を明らかにしよう。

現行パラダイムを乗り越える探求には、これまでになかったような視点と方法が必要だろう。新しい古代史像は、王朝の交代があったというものである。ところが、東アジアで圧倒的な影響力をもった中国では、易姓革命が古くから唱えられ、王朝の交代による国家体制の変更が通常の出来事だった。だから、列島で王朝の交代があったとすれば、古代中国の政治規範に影響を受けたと考えられる。そこで、中国の歴史書で事例を調べ、対照させて探るのが有効だろう。その視点から、「中国史書」を、そして朝鮮半島の史料も読むことが必要である。

空間を東アジアに広げ時間も前後に延長して、歴史を連関するものとして大局的にとらえ、この列島で国際的に認められた王国が発生・発展・移行した痕跡はないかを探求しよう。さらに、王朝交代があったとすれば、それは歴史のさまざまな面に刻まれたはずで、日本の後代に影響を残したのではないかということまで考えよう。